論　説

グローバルサウス再考Ⅰ
――今日的位置：課題と挑戦――

松　　下　　洌

Ⅰ　はじめに
Ⅱ　言論空間に拡がる「グローバルサウス」
⑴「グローバルサウス」概念の急増とその特徴
⑵　なぜ「グローバルサウス」か？：概念誕生の契機
⑶「グローバルサウス」研究の起点
Ⅲ「グローバルサウス」概念の「定義」と視座
⑴「グローバルサウス」への多様なアプローチ
⑵「グローバルサウス」理解の三つの主要な流れ
⑶「グローバルサウス」研究の現段階：批判的検討課題
Ⅳ「グローバルサウス」の分析枠組みとアプローチを内実化する
⑴　地理的・概念的・歴史的境界線を越えるダイナミズムの検証
⑵「グローバルサウス」における「抗争」
⑶「21 世紀」の世界認識に有効な視角か
Ⅴ　結び

Ⅰ　はじめに

現在、政治・経済・社会・文化など様々なレベルで戦後のシステム「危機」が進んでいる。このような認識は多くの人びとだけでなく、歴史の現実であろう。その結果、人びとにとっての生活空間の揺らぎと破壊を生み出してきた。世界各国・各地で人びとの不安や不満を吸収する形で政治・社会の保守化や権威主義化が拡大・深化している。また、世界各地でポピュリズム的潮流が急浮上し、人びとの分断化が加速度化している。

2023 年 7 月現在、ロシアのウクライナ侵略が続いる。この戦争に象徴されるように、国家

と地域の安全保障が不安定化・脆弱化している。しかも、その背景として、冷戦後の世界はグローバル化の浸透・拡大を伴って大きく変化したことがある。人類は、気候変動と地球環境の悪化にも起因する生態系的危機から戦争、貧困・食糧危機、不平等、疾病、急増する難民の悲劇的状況、多様な越境型犯罪などに直面している。世界秩序を脅かす焦眉な問題群と緊急を要する人類的課題が日常的に浮上している。さすがに、人類的・地球的な「危機」に敏感ともいえないわが国の人びとも、世界の民衆と同じく今日の「危機」的状況を感じ始めている。そして、各国政府はこの「危機」に対応を迫られている。

世界経済フォーラム（WEF）は、「分断された世界における協力の姿」をテーマに 2023 年 1 月、年次総会（ダボス会議）を開催した。この年次総会を前に公表された 2023 年版のグローバル・リスク報告書（*Global Risks Report 2023*）では、「ポリクライシス（Polycrisis）」という言葉がキーワードとして登場した。現在あるいは将来の複数のグローバルリスクが絡み合って複合的な影響や予測できない結果を生み出す。このグローバルな危機が単独に存在するのではなく、連鎖して増幅する「複合危機」を生み出す、「ポリクライシス」とはこうした状態を意味する言葉である。同報告書（3. Resource Rivalries: Four Emerging Futures）では、需給ギャップの拡大による天然資源危機が、環境･地政学･社会経済的リスクと相互に絡み合って「資源競争（Resource Rivalries）」と呼ぶべき「ポリクライシス」が起こる可能性を指摘している。

他方で、国際 NGO のオックスファムは、世界経済フォーラムに合わせて経済格差に関する年次報告書を発表した。世界上位 1％の富裕層が過去 2 年間で新たに獲得した資産は、残る 99％が獲得した資産のほぼ 2 倍に上ることが、発表された経済格差に関する年次報告書で明らかになった。それによると、上位 1％の富裕層の資産は過去 2 年の間に 26 兆ドル（約 3312 兆円）増えたのに対し、残る 99％の層の純資産は 16 兆ドルの増加にとどまった。世界のビリオネア（保有資産 10 億ドル以上の富裕層）の純資産は合計で 11 兆 9000 億ドル。21 年暮れに比べると 2 兆ドル近い減少だが、20 年 3 月時点の純資産 8 兆 6000 億ドルを大きく上回っている。

多くの非富裕層は苦境にさらされている。およそ 17 億人の労働者は賃金を上回るペースでインフレが加速する国で暮らしている。世界の貧困層は 2020 年に激増し、昨年は貧困層の縮小が滞った公算が大きい。「普通の人たちが食品など日常の必需品を犠牲にしている一方で、超富裕層は予想以上に大きな夢をかなえている」。オックスファムはそう指摘する。

こうして、富裕層を代表する世界経済フォーラムによっても「ポリクライシス」と呼ばれる重層的危機と分断化された今日、そしてウクライナとロシアの戦争が展開するなかで、先進 7 カ国首脳会議（G7 サミット）が広島で開催された。この戦争の影響は、とりわけ食料供給の激減や旱魃に苦しむ地域の貧困層を直撃している。今回の G7 サミットは、「グローバルサウス」を代表する国と想定されているインドやブラジルのような新興国が参加するなかで、その協力

とその成果が注目されていた[1)]。

今回のG7サミットを契機に、わが国でも遅ればせながらやっと拡がった「グローバルサウス」とは如何なる内実と意味を有する概念であろうか。わが国の政府やマスコミはこの概念をめぐって「迷走」してる感がある。従来のサウス＝「南」に修飾語の「グローバル」を付け足しただけにすぎない安易な論調も見受けられた[2)]。それはさておき、広島でのG7サミットは、「グローバルサウス」の視点から如何なる意味を持ったであろうか[3)]。

『AERA』（2023年6月19日号）で三牧聖子氏が述べている。「グローバルサウス諸国から見れば失敗のサミットだった」と。同時に、明らかになったのは、「グローバルサウス」を「代表」すると考えられたブラジルのルラ大統領とインドのモディ首相の間での様々な温度差である。両者の会談は実現しなかった。ルラ大統領はサミット後の記者会見で、「ウクライナとロシアの戦争のために来たわけではない」と持論を展開した。

本稿は「グローバルサウス」概念をめぐる政治的・社会的・経済的な諸側面を振り返える。そして、この概念の今日的意味と位置を再考し、その課題と「挑戦」を考察する。
考察の順序は以下のようになる。第一に、言論空間における「グローバルサウス」の拡がりでは、この概念の登場の背景とその特徴、および研究上の「起点」を考える。

第二に、「グローバルサウス」概念の定義（あるいは理解）と視座、そしてアプローチをおさえ、研究上の到達点を要約する。

そして、最後に、「グローバルサウス」の分析枠組みとアプローチを内実化する課題に触れる。すなわち、21世紀後半から今日までの支配的システムである新自由主義の時代に「グローバルサウス」は如何なる意味と実体を有してきたのか、そこにおける政治形成の空間としての「グローバルサウス」とはどのようなものか、この空間が様々な今日的課題にどのような挑戦に取り組めるか、すなわち、21世紀の世界にこの概念は有効なのか、等々。

本論で後に示唆するが、「グローバルサウス」は地理的・静的な概念ではないし、国家中心的な概念でもない。今日においても、それは確定的な定義はないであろう。「グローバルサウス」内部には多様なアクターと諸契機が複雑に絡み合っているが、重要な点は今日における時代認識とアプローチの仕方、そして「グローバルサウス」の動態的な内実であろう[4)]。

Ⅱ　言論空間に拡がる「グローバルサウス」

⑴　「グローバルサウス」概念の急増とその特徴

「グローバルサウス」は、学術的論文で増加している。抄録および引用データベースScopusによると、分野を超えた出版物における「グローバルサウス」への言及は、1990年代以降ほぼ指数関数的に増加しており、過去15年間で特に急激に増加している。しかし、明示的な定

義と事実上の理解との関与は限られていた。人文科学と社会科学全体で「(グローバル)サウス」の概念の背後にある理解とダイナミクスについて議論する多くの貢献があるが、詳細な議論は学術的関与の主流に達していない。「北」と「南」の枠組みは、アフリカとアジア全体の脱植民地化プロセスで普及したが、世界政治の分析における「グローバルサウス」への言及の急増はかなり最近の現象である（以下、強調は筆者)。

「グローバルサウス」の概念は、今日では研究をフレーミングするための一般的な装置になっている。Scopus データベースは、過去数十年にわたる査読付き英語圏の出版物におけるこの傾向の発展をマッピングするための有用なプロキシを提供している。タイトル、抄録、キーワードにおける「グローバルサウス」への言及は、ここ数年で特に拡大しており、1994 年に 1 件の登録出版物、2005 年に 30 件、2020 年に 1600 件以上がこの用語に言及している。

しかし、「グローバルサウス」の概念の急増は、「グローバルサウス」が何を意味するのか、さらに重要なことに、「グローバルサウス」のフレーミングが実際に分析的な議論にどの程度活用されるかを明示的に定義せずに、カテゴリーを所与のものとしてとらえていることを示唆している。それは、広大な空間の中での経験的現象に関するあらゆる種類の研究を組み立てる傾向がある。そうでなければ、または同時に「第三世界」、「発展途上国」または「非西洋」と呼ばれている。「グローバルサウスとして、カテゴリ自体との体系的な関与はしばしば欠落している」のである（以上、Haug, Braveboy-Wagner & Maihold, 2021, pp.1923-1925)。

⑵　なぜ「グローバルサウス」か？：概念誕生の契機

〈なぜグローバルサウスか：二項対立概念の終焉〉

「グローバルサウス」概念については、既に別稿（松下、2016; 2016b, 他）で論じたのでここでは本論との関係で簡単に触れておきたい。「グローバルサウス」概念が登場する背景は、新自由主義を生み出してきた 20 世紀型資本主義（国民国家を前提にした「フォード主義的 - ケインズ主義的」資本主義)の限界および冷戦の終結をひとつの契機にした新自由主義型グローバル化の加速度的進行にある。

このグローバル化の展開のもとで実に多くの越境型の問題群が噴出してきた。たとえば、環境悪化、世界的規模での格差拡大、不法移民・難民増大、多様な形態の国境を超える犯罪、コモンズ――保健、水、輸送、エネルギー、知識、種子など――の収奪などがすぐにあげられる。これらの現象は、いまや、国家と社会の安全保障のみならず、リージョナルやグローバルな社会を危うくする脅威として考えられるようになった。また、世界的規模で展開するアグリビジネスの戦略や投機的ビジネスは、庶民の日々の生活の様々な領域で直接影響を及ぼしている。こうして、グローバル化の影響は不均等にではあるが、リージョナルな空間のみならずローカルな場にまで、普通の民衆の生活まで深く行き渡っていることは国際諸機関を含め十分認識さ

れている。

そして、新自由主義型グローバル化の影響は「南」の人びとだけではない。「北」の人びとも同様である。多国籍企業の先例のない権力と拡がり、そして、そのグローバルな生産の展開により、グローバルかつナショナルに富の激しい集中があり、超富裕層と大多数の人々とのギャップは拡大している。新自由主義型グローバル化は「グローバルノース」と「グローバルサウス」との間に、また一国内においても急激な社会的不平等を生みだした。

注目すべき現実は、「南」と同様な貧しい場所は「北」にも多数存在し、同時に、「南」のエリートが富を蓄積している多くの裕福な地帯が「南」にもあることである。グローバル化のもとで、国境を越えて組織され拡散されている新たな社会的ヒエラルキーや不平等の諸形態が出現しているのである。

こうした社会的ヒエラルキーと不平等のグローバルな存在は、従来の「途上国」や「南」といった概念では捉えきれなくなっている。グローバル化時代の「南」は、かつての「南」ではなく「グローバルサウス」なのである。冷戦終結後、「第二世界」の崩壊により「第三世界」概念は言うまでもなく使われなくなった。先進国へのキャッチアップをイメージした「発展途上」という用語も、「先進」と「途上」の二項対立も有効性を失いつつある。

こうした区分は地理的・空間的な現実を反映している静態的な類型化であった。また「途上国」という表現は、欧米中心の経済主義的基準にとらわれていた。さらに、それは国家中心的な二分法的発想も免れていない。こうして、いまや「途上国」や「南」といった概念では、今日の世界を認識する枠組みとしては不十分と考えられるようになった（Bullard, 2012）。

〈分断化が促進する生活空間〉

1980 年代に本格化した新自由主義や冷戦の崩壊とグローバル化は、それまでのケインズ主義とフォーディズムのもとで統合的な社会編成を大転換させた。以後、グローバル化が世界の分離と分断化に結びついた選択的包摂・統合の不均等な分極化過程を推し進めてきた。

第二次世界大戦後の西欧で建設が始まった世界は包摂の論理、すなわち貧しい人々や周縁化された人々を政治経済秩序の中心に組み込もうとする協調的な取り組みに駆り立てられた。だが 20 世紀末に向かうにつれて、ケインズ主義や平等主義、公正な社会を構築するプロジェクトを支えるネーションを基礎にした前提は崩れ始めた（サッセン、2017：254-255）。今日、20 世紀の衰退した政治経済の中から新しいシステムの論理が登場しつつある。

その衰退は 1980 年代に始まった。そして、現在、「分断化」のグローバルな現象はあらゆるレベルで認識され、政治的論争に発展している。貧困層の急増、高水準の失業、国内移住、住宅ローンの支払い不能による立ち退きと住宅の差押え、難民、犯罪の増加と収監の急増、民族的・宗教的対立の激化など等である。

こうした「分断化」は多様な暴力を生み出す温床になる。一部の途上国では、テロ、人身売買、違法伐採、違法ドラッグ、武器輸出、サイバー犯罪、資金洗浄など新自由主義がもたらす「構造的暴力」に直面している。ネオリベラリズム時代の「排除」と放逐により、多くのアフリカ諸国では「構造的な関連性の欠如」が明らかになった。

21 世紀に入りとりわけ、世界の「分断化」の象徴的現象として「壁」問題がマスコミ等をにぎわせている。国民国家システムには、権力と領域との間に固定的な関係が前提に構想されてきた。ウェストファリア諸原則は領域主権と厳格に引かれた国境を前提に国民国家という擬制のうえに構築されていた。しかし、それは現実の上では決して絶対的なものではなかった。

中南米諸地域から米国に向かうキャラバンの波や中東・アフリカ諸国からヨーロッパに向かう難民の悲惨さからも国家と国境とは何かを問うことになる。経済や貿易の領域では、多国籍企業は共通市場や低関税から恩恵を受けている。だが、移民や難民に加え、テロリストやマフィアなどの非合法あるいは破壊的なグループの越境を防ぐとの口実のもとに過剰なフェンスの建設が促進されている。

〈破壊と収奪に脅かされる生活基盤〉

こうして、「分断化」という言葉は様々な含意を含んでいる。上述のように、多様で広範な差別、搾取や略奪、経済格差や教育格差、市民的諸権利や基本的ニーズへのアクセス、国境や壁、カースト制度やアパルトヘイト、難民や移民、等々。しかし、「分断化」は排除・周辺化と統合・包摂という過程を伴っていることにも留意することは必要である。

サスキア・サッセンは「放逐」という概念によって、今日の「グローバル資本主義の病理を把握する一つの方法である不平等の増大などの概念を踏み越える」ことになる、という。こうして、「放逐」はグローバル資本主義の深く深刻な危機的病理を全体的にとらえる概念として適切であるように思える。

「放逐」プロセスに共通する点はその深刻さである。豊かな国々の中間層の窮乏化、数百万の小規模農家の立ち退き、破壊的な資源採掘、無数の避難民、新しいタイプの放逐としての深刻な住宅危機（米国の 900 万世帯）など（サッセン、2017：17-19）。

⑶ 「グローバルサウス」研究の起点

〈世界政治研究における「メタカテゴリー」〉

前述したように、「グローバルサウス」概念は近年急増している。そこで注目されるのは、Haug, Braveboy-Wagner & Maihold,（2021）による研究の貢献である。この研究成果は、現段階の「グローバルサウス」研究を幅広く渉猟し、この研究の諸アプローチと諸課題を検討し、その到達点と特徴をバランスよく紹介している。その意味で、今日における「グローバルサウ

ス」研究の包括的で基本的な「案内書」となっており、この研究を発展させるスタートラインとして確認しておくべき位置にある。

本論文の基本的な特徴はそのタイトルに示されている。すなわち、「グローバルサウス」を世界政治研究における「メタカテゴリー」として位置づけている。言い換えれば、グローバル空間の分類のためのツールとして「グローバルサウス」を分析的に使用できるのか、どのように使用できるのかを検討している。

そのうえで、本論文は「グローバルサウス」概念が世界政治を研究するための有用な概念ツールであると以下のように強調している。

〈世界政治の分析のための南北二分法の可能性と限界〉

Haug たちは次のように主張している。

> 「メタカテゴリーの大きな可能性は、複雑さを削減する必要性の一環として、世界全体を触知可能にするだけでなく、より詳細な注意を必要とする経験的パターンを指摘することで構成されています。植民地と帝国の支配の継続的な残響、長年の社会経済的分裂、または多国間交渉の進化する慣行の分析には、複雑な絡み合いを理解し、幅広いダイナミクスを具体的な経験に結び付けるためのメタカテゴリーが必要です。」

メタカテゴリーとしての言葉を借りれば、「グローバルサウス」は「国際的な階層内で歴史的に成長した疎外とその認識論的意味合いについて私たちを敏感にする関係カテゴリー」として役立つ可能性がある位置にある」。「北」と「南」についての問いは、必然的に世界政治の研究における経験的現象に関する多くの潜在的な視点の１つである。したがって、問題は、「南」と「北」のカテゴリーが目前の特定の研究の焦点にどのように適合するか、そしてそれらが分析を埋め込んだり鋭くしたりするのにどの程度役立つかということでである（Haug, Braveboy-Wagner & Maihold, 2021, p.1933）。

「グローバルサウス」をそれ自体をカテゴリーとして受け止めることで、世界政治を理解する方法が改善されることが提案されている。これは、定義や仮定を明確にすることに加えて、カテゴリーが議論、理解、説明、または明らかにするのに役立つもの、およびそれが調査対象でなくなった場所を意識的に確認できることになる。

全体として、この巻（*Third World Quarterly*, Volume 42, 2021）は、メタカテゴリーに焦点を当てることが重要である理由を明らかにしている。学問の伝統や分野を超えて、メタカテゴリーの明示的な定義と暗黙の意味は、世界が調べられ、書かれる方法を形成する。この巻のそれぞれの論文が主張する「グローバルサウス」との意識的な関係性は、研究の質問を組み立

て、急速に進化する学術的調査の風景に身を置くために使用する用語に対し、より広く、より意識的なアプローチを反映している。したがって、この巻は、「グローバルサウス」を分析ツールとして使用することの利点と限界についての洞察を提供するだけでなく、学術的調査でメタカテゴリーに関与する方法についての考察とインスピレーションのためのスペースをも提供することを目的としている[5)]。

Ⅲ　「グローバルサウス」概念の「定義」と視座

⑴　「グローバルサウス」への多様なアプローチ

「北」と「南」の言い方は、最初にブラント委員会レポート *North-South: A Programme for Survival*（1980）で普及した。この委員会レポートの最も重要な見解は次の点にあろう。すなわち、経済的に貧しい諸国あるいは途上国（「南」）は、経済的に豊かな諸国あるいは先進国（「北」）に経済的に従属する、このことである。この言い方は、1980 年に、大多数の貧しい周辺国が南半球にあり（白人の南アとオセアニアを除いて）、他方、裕福で強力な諸国（すべての G7 諸国と非共産主義の国連安全保障常任国）が北半球に位置するという「地理的事実」に基づいていた。

1950 年代、独立闘争と第三世界ナショナリズムが旧来の植民地関係に抵抗し、その関係をつくり直していたが、その時期、ラウル・プレビッシュ（Raúl Prebisch）とハンス・シンガー（Hans Singer）は、経済的後進性を説明するため従属論を前進させた。彼らは第一世界と第三世界（北と南）との間には交易条件の一貫した低下が存在したと分析した。

センター―ペリフェリーの枠組みは、1970 年代以降、イマヌエル・ウォラースタインにより発展させられた。彼は国民国家よりも世界システムが分析単位であるべきだと主張した。彼によると、近年の資本主義世界システムは統合されたひとつの全体であり、単一の国際分業に基づいた、中枢、セミ・ペリフェリー、ペリフェリーからなっている。資本主義世界システムは国民国家ではなく、政治的・文化的権力の中心を持つグローバルなシステムに基盤を持っている。

途上国は、輸入代替工業化戦略のようなナショナルな政策を採用することで、ペリフェリーに割り当てられた役割から抜け出すことができると信じていたプレビッシュやシンガーとは違い、ウォラースタインは、世界システムが IMF や世界銀行、金融市場のような国際的諸制度、軍事干渉、貿易上の制裁、これらによって強制され監視されてと主張した。さらに、世界システム論は、歴史や社会学や経済、政治の間の相互連関性に基づいた「諸事件の長期的な展開」を強調した。

〈GSSC の議論〉

簡単に振り返った以上の「南」と「北」の歴史的関係を背景として、近年、広範囲かつ様々な領域でグローバリゼーションと南北関係の若干の研究において関心が高まり、議論が展開されている。その研究動向に位置する一つの流れが、本稿で考察する「グローバルサウス」である。そこで、この概念に関する研究を進めているケルン大学のグローバルサウス研究センターGSSC（the Global South Studies Center）が発行する The web magazine *Voices from Around the World*（「世界中の声」）で展開された議論を眺めてみる。2015 年に創刊されたこの雑誌は、「硬直した空間的、時間的、および学問的境界を超えて、世界中の思想家からの見解を提示することによって、新たな議論を開始すること」を目的としている。*Voices from Around the World*（2015 年 1 月号）は「グローバルサウスの概念」の特集を 14 本組んでいるが、特徴的な議論の一端を紹介しておく[6)]。

この特集号では、現在の形態のグローバル資本主義の代替案についてのいくつかの考えと、それらが深化するかどうか、そしてどのように進化するのか、この点についての考察の目的を提示している。

> 「既存の経済的正統性は、私たちが直面している課題に対する十分な理解や解決策を提供していないことをますます理解しています。主流の思想家でさえ、現在の経済モデルには、特に不平等、資源の枯渇、汚染などに関して、さまざまな破壊的傾向があることを認識しています。」

このように指摘する「序論」Introduction: Concepts Of The Global South（Andrea Hollington, Oliver Tappe, Tijo Salverda, Tobias Schwarz）で提示されている議論をまず紹介する。

〈用語の歴史的起源〉

「グローバルサウス」の歴史的起源に触れて、トーマス・ハイランド・エリクセン（Thomas Hylland Eriksen）とジョナサン・リッグ（Jonathan Rigg）は、とりわけ、世界のさまざまな（貧しい地域と豊かな）地域を定義する歴史的軌跡に関して、この概念の出現を振り返っている。たとえば、リッグは、この用語が完璧ではないことを認めている。それでも彼は、その前身である「第三世界」または「発展途上国」よりも有益であると考えている。

新しい用語を考えだしたい衝動は、「グローバルサウス」の概念の政治的意味合いを浮き彫りにしている。それはまた、良くも悪くも政治的な重みをもっている。

ジャーナル『グローバルサウス』の共同編集者として「グローバルサウス」を振り返るリー

アンダック（Leigh Anne Duck）は、この用語のプラスの影響を強調している。「第三世界」や「発展途上国」と比較して、「グローバルサウス」という用語が覇権勢力に抵抗する上でより重要である、と彼女は考える。

ロンドン・スクール・オブ・エコノミクス・アンド・ポリティカル・サイエンスのグローバル・サウス・ユニットの共同創設者であるアルバロ・メンデス（Alvaro Mendez）は、「グローバルサウス」が前例のない注目をあびており、ブラジル、中国、インドの主要国の生産高がカナダ、ドイツ、イタリア、英国、米国の合計生産量とほぼ同じであることを指摘する。

バーバラ・ポタスト（Barbara Potthast）は、ラテンアメリカの場合、この概念が実際に世界の他の地域との関係の再考にどのようにつながるかを強調している。

〈南–南関係〉

ボイケ・レーバイン（Boike Rehbein）は、この用語を選択する人々は主に、南–南関係の拡大などを通じて、政治的および経済的現実から利益を得るグローバルサウスの上流階級のメンバーである、と述べている。どの用語が使用されているかは、いわゆる「グローバルサウス」の住民の大多数にとってほとんど重要ではない。確かに、フェリックス・ラメック・モガンビ・ミンガテ（Felix Lamech Mogambi Ming'ate）は、「グローバルサウス」の一部と見なされている国に住むほとんどのケニア人にとって、それはほとんど意味がないことを示唆示している。

〈グローバル資本主義との関係性〉

問題は、グローバルサウスと呼ばれる地域の地理的境界に関わっている。それは、地球の北半球と南半球の間の分割の概念を容易に思い起こさせる。ケニアのような国は、両方のカテゴリーに属している。しかし、リッグも強調しているように、赤道が世界を2つに分けるという用語は文字通りに解釈されるべきではない。代わりに、それはグローバリゼーションのより広い文脈、グローバル資本主義で理解されるべきである。ほとんどの場合、それは豊かな国と貧しい国の間の経済的分裂に関連し、いわゆる「グローバルサウス」のほとんどの人々は実際に北半球（たとえば、インドや中国）に住んでいる。さらに、トビアス・シュワルツ（*Tobias Schwarz*）が国連の分類に関する批判的な反省で示しているように、それは移民などの他の領域にも波及している。

「グローバルサウス」の概念について、「明らかなことは、この用語の政治的使用と結果から逃れることは難しい」ということを序論では確認している。

たとえば、ディルリク（Dirlik）とレーバイン（Rehbein）は、グローバルサウスと地政学との密接な相関関係について強調している。結果として、「グローバルサウス」の概念は「静的な概念ではない。地政学的な変化に伴い、グローバルサウスの定義も変わる可能性」がある。

用語の意味だけでなく、ディルリクが示すように、「どの国がグローバルサウスの一部であると見なされ、どの国がそうでないかに関しても。これは、誰がグローバルサウスの一部であり、誰がそうでないかについて、またはそもそもこの用語を適用することが実際に有用であるかどうかについて、必ずしも合意がない」ことを意味している。

〈地域的・国内的な歴史的関連性〉

ロドルフォ・マガジャネス（Rodolfo Magallanes）は、多種多様な国や地域を１つのカテゴリーにまとめるという考えに特に批判的である。これは、「特に不平等なパワーバランスに関しては、異なる国や地域間の特定の（歴史的な）関係を曖昧にする傾向がある」と彼は主張している。あるいは、エリクセン（Eriksen）が主張するように、それは「国内の富の違いを曖昧にする」かもしれない。したがって、「グローバルサウスとグローバルノースの富裕層の間の類似点、そして貧しい人々が世界中で直面する可能性のある悲惨な状況」を曖昧にするかもしれない。

以上のように、こうして、「グローバルサウスの概念についての GSSC の議論」の「序論」で要約的に紹介されたこの一連の貢献は、グローバルサウスという用語に関する興味深い様々な見解や意見のスナップショットを提供している（議論の詳細は、参考文献のリストを参照）。結局のところ、ほとんどの貢献が強調しているように、「グローバルサウス」は文脈に依存している。

> 「地政学的な不確実性の時代には、この用語がどのように発展し、それに応じて変化するかを予測することは困難です。未解決の問題の１つは、それが実際に世界の利益と権力のより平等な分配の障害になるのか、それとも不利な長い歴史を持つ世界の地域に実際に力を与えるのかということです。」

それは、この用語の単なる使用が、良くも悪くも意味を持つ可能性があることを示唆している。しかし、この概念の使用の増加は、マヌエラ・ボアカ（Manuela Boatcă）が主張するように、「特定の歴史的瞬間の現実を説明するのに便利と思われる用語は、それぞれの社会経済的および政治的構造に密接に関連」している。

〈GSSC の議論の補足的コメント〉

そこで、「グローバルサウス」に関わる GSSC の議論の中で明らかになっていると思われるいくつかの問題点を見てみる。

まず、従来のグローバルな分類の主な欠点の１つは、方法論的ナショナリズムである、エリ

クセンはこう指摘する。GDP や HDI や経済的格差といった国家レベルの各種の指標は、現地の人びとの生活実態を表していない、あるいは限界がある。世界の大多数の人びとは、「諸国家ではなく、主にコミュニティに住んでいるためコミュニティの生活の質と経済状況を測定するためのよりきめ細かい手段」となるであろう。

グローバル化の構造とプロセスに関して、リッグは強調している。ブラント報告書の限界が確認されるべきであると。このレポートは、南北線（またはブラント線）を特定し、「南」という用語を普及させた。しかし、これは、「南部諸国を貧しくした政治的および経済的プロセスと歴史的遺産を再び視界から隠した」という批判をうける。北と南の両方が、世界の別々の単位として存在するのではなく、「グローバルサウス」は一緒になってグローバルなプロセスに引き込まれることを強調している。その状況は、グローバルノースの状況に対して設定されている。グローバルなプロセスと構造により、すべての国がますます統合された世界の一部になっているのである。

ロドルフォ・マガジャネスは、「グローバルサウス」という集合的なラベルに隠された問題を指摘する。この合成用語は一定の利点を提供するが、「貧しい国と最も裕福な国を区別する複雑な社会的状況を説明するために単純な地理的基準を使用しているため曖昧である……暗黙の南北二分法は、ラベルが示すほど地理的に固定されたことはない」と。

さらに、「グローバルサウス」という用語は、さまざまな種類の国、特に歴史的、経済的、社会的、文化的、政治的変数などを特徴付ける「動的変数の重要なコア」を省略している。「グローバルサウス」の概念は、その静的な性格に関連して異なる国々が長い歴史（植民地主義と新植民地主義）を通じて維持してきた関係を十分に考慮していない、こう強調している。

オラフ・カルトマイヤー（Olaf Kaltmeier）も同様な指摘をしている。「グローバルサウス」概念は、「現実世界の複雑な絡み合いや不均一な発展に対応していません。グローバルサウスというラベルで組み込まれている地域は、地理的な北部にもあります」。アフリカ系アメリカ人の都市の民族ゲットーとバリオをその一例として挙げる。さらに、リオデジャネイロ、メキシコシティ、またはサンティアゴデ・チリの国際的なエリートのゲーテッド・コミュニティは、周囲のバリオ、ファヴェーラよりも、マイアミ、ロサンゼルス、シカゴのカウンターパートと共通点があると言う。

「グローバルサウス」の不均等な発展を特に指摘しているのは、ディルリクの論文である。中国、インド、ブラジル、トルコなどは、グローバリゼーションの恩恵を受けてグローバルな国際関係においてより積極的な展開を示している。中国は世界のリーダーシップと覇権を目指している。最近の「南 - 南関係は、植民地主義を彷彿とさせる搾取関係である可能性が非常に高い。内部的にも、新自由主義型グローバル化の体制の下での開発は、個々の国家内に不平等を生み出した。先進資本主義世界における経済的（したがって政治的）寡頭制に対する同じ傾

向はグローバルサウス」にも見られる。

ディルリクは続けて言う。発展途上社会の主要な都市中心部は、「富と権力の集中によって後背地から離れた資本のグローバルネットワークのノードとしてますます機能しています。地域の不平等は、富が社会のますます少ないセクターに蓄積されるにつれて、世界中の社会における階級の違いを鋭くする」ことを伴う。その結果、「経済的、政治的、文化的分裂と断片化が生まれ、国家間の平等のビジョンとはかけ離れて」いる。この用語は、今日、「北と南を分ける線は、北、南、そして両方を横断している」。

概念と地理的ラベルに関して、マヌエラ・ボアカは強調する。現代のヨーロッパの地図作成の出現は、「西ヨーロッパの植民地と帝国の拡大と密接に関連していた」という事実にある。したがって、「無実の」地理的ラベルも中立的なラベルも存在しないのは事実である。しかし、「中立的な用語を持たないことは、用語がまったくないことと同じではない」。私たちが「概念と地理的ラベルを歴史化し、文脈化する限り、それらは議論を促進し、特定の文化的地政学的空間内で知識生産を見つける（不完全な）分析ツール」である、こう評価している。

⑵ 「グローバルサウス」理解の三つの主要な流れ

「グローバルサウス」への関心と学問的考察は、その起源と発展過程、関心領域、国際政治の推移と関連性、そしてこの概念の「定義」（枠組みやアプローチを含め）は、今日ますますその関心と重要性は強まっている。前述のケルン大学 GSSC の The web magazine *Voices from Around the World* は、現時点の仮題と問題点を含め多くの成果を発信してきた。同じく *Third World Quarterly* がこれまで公表した「グローバルサウス」関連論文も貴重な成果を積み上げてきた。

繰り返しになるが、とりわけ、Haug, Braveboy-Wagner & Maihold（*Third World Quarterly*, 2021）の貢献は無視できない。しかし、「グローバルサウス」に関する言及や論考は、かなりの数量であり内容的には多岐にわたる。そこで、まずその理解（「定義」）を押さえておく。「グローバルサウス」に関する 3 つの理解（「定義」）が共通認識となっている。ここでは、*Third World Quarterly* (2021) の「序論」とその執筆者の一人であるセバスチャン・ハウグ (Sebastian Haug）[7]、そしてアン・ガーランド・マーラー（Anne Garland Mahler）[8] を取り上げる。

まずは、セバスチャン・ハウグの理解である。

「グローバルサウス」の 3 つの理解は、世界政治の分析において特に普及した。

第一に、人びとは一般的に「グローバルサウス」を世界の貧しい地域および / または社会経済的に疎外された地域を指すと見なした。世界銀行の一人当たり所得指数は、開発レベルをマッピングし、国や地域を長年にわたり比較するための一般的な指標となっている。だが、「グローバルサウス」とは、半球の南だけを指すのではない。これは、「古い植民地時代の権力の中心

地のほぼ南に位置する脱植民地化された国々の一般的なルーブリック」であった。

第二に、「グローバル・サウス」は1955年のバンドン会議、非同盟運動、国連のG77を参照して、「地域間および多国間同盟」を支持してきた。これは、旧宗主国が支配していたものを超えたプラットフォームと協力慣行を備えた「三大陸空間」である。

第三に、「グローバル・サウス」は、新自由主義資本主義に対する抵抗の空間として提示されてきた。国ベースの視点を超えて、これはどこでも起こり得る反覇権的関与のマーカーとして「グローバルサウス」を再構成してきた。

もう一人は、アン・ガーランド・マーラーである。彼女によると、「グローバルサウス」にはやはり3つの定義がある。第一に、国連などの機関がアフリカ、アジア、南米を指す地理的な区分としてこの用語を用いるケース。

第二に、研究者や活動家が「現代の資本主義のグローバル化によって負の影響を受けている世界中の場所や人々」を指して「グローバルサウス」と呼ぶ場合。

北半球にもグローバルサウスは存在するというこの見方から派生した第三の定義として、「複数の“南”が互いに認め合い、どの“南”にも共通する条件について考えるグローバルな政治的コミュニティー」もグローバルサウスを名乗るようになった。

ほとんどの説明は、この3つの理解の1つ、またはいくつかに暗黙的または明示的に言及している。

他方で、以上加えて、3つすべてを組み合わせて、資本主義の現状に代わるものを策定するために、ポストコロニアルおよび/または発展途上国の多国間軌道上に構築された国境を越えた運動を重視する主張もある（例えば、Vijay Prashadの研究）。

「グローバルサウス」の輪郭と所在に関する対応は、その主題や政策分野、およびそれらが提起された文脈を検討する必要性がある。世界政治研究における「メタカテゴリー」として位置づけられた「グローバルサウス」の貢献は、明確な定義の有無にかかわらず、一方では社会的・経済的限界性と、他方ではこれらのかなり限界的な国際的位置から少なくとも部分的に生じる多国間同盟の国家中心の組み合わせに依存する傾向があった。

⑶ 「グローバルサウス」研究の現段階：批判的検討課題

〈「グローバルサウス」の分析の可能性〉

セバスチャン・ハウグは「グローバルサウス」研究の現段階とその課題を整理している[9)]。

世界政治に関する幅広い研究は、「グローバルサウス」をメタカテゴリーとして利用することで研究成果を受けることができる。それは、「南部」の国や人々がそれ自体が貧しいと仮定するなど、抜本的な一般化を避けることを私たちに要求する。

代わりに、研究者は研究の対象への問にアプローチするために南北の用語を使用する理由を

熟考し、また、この選択の意味も考慮する必要がある。すなわち、「アフリカ、アジア、ラテンアメリカに関連するすべての研究」を「グローバルサウス」研究と呼ぶなど、表面的な枠組みは避けるべきである。

「グローバルサウス」に焦点を当てる場合、この対象が重要である理由と、それがグローバルまたは国境を越えたつながりの分析とどのように関連しているかを明確にすること、それによって対象の分析的な成功を収めることが可能となる。たとえば、中国、インド、ブラジルの経済的および政治的「台頭」は、国際的ガバナンスにおける「南部」諸国間の連帯の促進に影響を与えている。気候正義の問題からパスポートの比較研究まで、国境を越えた不平等についての議論も、慎重に適用された南北の枠組みから成果を得ることができる。

〈「グローバル・サウス」の研究〉

関係カテゴリーとして、「グローバルサウス」は、具体的な意味を持つ今日の世界の構造とダイナミクスを分析するのに役立つ。これは、歴史的に成長した不平等のパターンなど、場所（サイト）の距離間および時代の隔間の結びつきに注意を向ける。そうすることで、世界政治の現在の輪郭を解釈する際に、（ポスト）コロニアルと（ポスト）帝国の軌跡を考慮する必要性を強調している。

「グローバルサウス」という用語自体の使用を分析することで、知識の生産と普及についてより多くを明らかにすることができる。例えば、パウロ・フレイレの参加型アクションリサーチ（participatory action research）では、カテゴリーがどのように、誰によって採用されるようになったのかを調べることがでる。エドワード・ソジャの空間理論（spatial theory）は、カテゴリーがサイト間でどのように意味で満たされるかの異なる次元を指摘している。ナイジェリア・イボ民族出身の作家のチママンダ・ンゴズィ・アディーチェー（Chimamanda Ngozie Adichie）に触発されて、ポリフォニー（polyphonies）（さまざまな実践が共同現象に寄与する方法）に焦点を当てることで、多くの人々が使用するカテゴリーの複雑さをさまざまな方法で議論することが可能になる[10]。

結局、このように、ハウグおよびそのクループはメタカテゴリーに関する研究を通じて、世界政治の研究における根本的な問題を提起し、その取り組みに貢献することを強調している。

〈マーラーの幅広い研究の拡がり〉

マーラーは、彼女の「グローバルサウス」認識から、この研究状況の現段階を踏まえて今後の課題を幅広く検討している。彼女が取り上げているテーマは、「地理的位置と状況的位置」、「ノースの中のサウス」、「サウスの理論」、「政治形成としてのグローバルサウス」、「グローバルサウスの都市と社会運動」、「グローバルサウス対ポストコロニアリティ」、「グローバルサウ

スの歴史」など幅広く、それぞれにテーマに関わる文献も紹介しており、「グローバルサウス」研究者には極めて有益である[11)]。これらの若干の関連テーマに限定して触れておく。

地理的位置と状況的位置

国家ベースの地政学的形成としての「サウス」は、経済的に恵まれない国民国家間の経済協力を促進しようとした国連77グループのような開発および外交組織内で出現し始めた。それは、前に述べたように、1980年と1983年に発表されたブラント委員会レポートで固まり、普及し、南北の比喩を通じて世界の資本関係を特徴づけた。1990年代初頭のソビエト・ブロックの崩壊とワシントン・コンセンサスに関連する政策の世界的な実施を受け、「グローバルサウス」は、地理的な北と南の間の経済的分裂を表す領土的名称ではなく、裕福な国の国境内を含むグローバリゼーションによって悪影響を受ける空間や人々に対処するためにも頻繁に使用されている。

「グローバルサウス」は、国家中心の分析形態を超越する必要性と、現代のグローバル資本主義が「新しい、再スケーリングされた社会空間構成」を生み出す方法の認識を調和させる試みである。これらの新しい構成は、本質的に基本的に社会空間的である（Brenner, 2011）。言い換えれば、「グローバルサウス」は南半球の地理を単純化して指すのではなく、資本主義的蓄積の悪影響の地理的に柔軟な社会空間マッピングを指す。この指摘は、筆者の理解とアプローチに近い。

ノースの中のサウス

地理的な「北」内部の不平等への関心において、「グローバルサウス」は西欧の伝統を引きつけている。そこでは、「南」は長い間ヨーロッパと米国の両方の国内ペリフェリーと歴史的記憶の場所を表してきた。この伝統の中で、「南部」は一つの地域としてだけでなく、より経済的に活力があり近代的な「北部」に対する従属的関係に位置している。「グローバルサウス」の概念では、地理的な北部の南部に関連する地域主義や、冷戦の概念「第三世界」に暗示されている国ベースの地図作成に取って代わる。地理的な北における南の位置の考察と、世界中の不平等と疎外の空間を指し示す「状況的場所」としての南の概念への大きな貢献は、いわゆる米国南部の新しい南部研究の学者と南ヨーロッパに取り組む研究の両方の仕事によって築かれた。イタリアの研究者は、「南部問題」に関するグラムシアンの伝統を利用して国内の政治的・社会的・文化的従属問題を長い間分析してきた。米国南部研究の業績は、同様に、米国南部の「想像上の場所」を指し示してきた。人種差別やプランテーション農業のプロレタリア化など、再建後の米国南部における統治モデルが、米国帝国の拡大を通じてどのようにグローバル化されたかをしばしば取り上げている。

Ⅳ「グローバルサウス」の分析枠組みとアプローチを内実化する

⑴　地理的・概念的・歴史的境界線を越えるダイナミズムの検証

〈新自由主義の時代と「グローバルサウス」〉

サッセンの新自由主義とグローバル化の分析目的は、「放逐されたものの空間への移行過程を可視化すること、つまり、……放逐の目に見える場や瞬間をとらえること」である（サッセン、2017:257）。そこで、彼女の課題は「既定の概念的･歴史的境界線を越える他のダイナミックスも働いているかどうか検証すること」（サッセン、2017：259）にある。

ロビンソンは、「グローバルサウス」概念が「国民国家中心的分析から決別する」ことを強調する。ロビンソンの主張を借りるまでもなく、ナショナルを基礎にした時代認識は既に有効性を失っている。サッセンも認識しているように、「20 世紀末に向かうにつれて、ケインズ主義や平等主義、公正な社会を構築するプロジェクトを支えるネーションを基礎にした前提は崩れ始めた」のである（サッセン、2017：254-255）。

他方で、ロビンソンは次のことも強調している。「ナショナル・レベルの過程や現象、あるいは国家間ダイナミズムの分析を放棄」せず、「具体的地域やその特殊な環境を検討することなしにグローバルな社会を理解することは可能ではない。すなわち、その全体との関係で、全体の一部として検討すること」（Robinson, 2015：17）であると。

このロビンソンの主張は、サッセンによる放逐の空間であるグローバルサウスのシステムの末端の広範な考察によって補強され、説得性を確保するように思われる。

> 「放逐されたものの空間とは何か？それは近代国家や経済の標準的な尺度では見ることができない。しかし、それらは概念的に目に見えるものでなければならない。……放逐されたものの空間は概念的に認知されることを求めて叫んでいる。……それらは概念的に地表下の条件であり、地表に出す必要がある。それらは、ローカルな経済や、新たな歴史、新たなメンバーシップの形態を形成するための新たな空間となる可能性を持っている。」（サッセン、2017：266）

そこで、グローバルサウスを政治および社会を形成する空間＝場と位置付けることは意味があり重要である。

〈政治形成としての「グローバルサウス」〉

「メタカテゴリー」としての「グローバルサウス」を政治的形成として扱うことには 3 つの

主要な傾向がある。いずれも、「新自由主義のグローバリゼーションの代替案を特定し、想像すること」を中心に展開している（Mahler, 2017a）

1つ目は、ラテンアメリカの左派がしばしば中核的な事例研究として取り上げられる。旧「第三世界」の国民国家におけるナショナルなレベルとローカルなレベルの両方での進歩的運動の間の相関関係についての比較主義的考察である。

2つ目は、国家間の経済的および政治的な協力に関する研究、いわゆる「南–南協力」によって代表されている。この協力は一般に、搾取的な経済関係に代わる経済統合の一形態として提示されている（Dargin, 2007、Sandbrook, 2012）。

しかし、第三の傾向として、グローバリゼーションにおける権力と抵抗のネットワーク化された性質に関する一連の理論的研究がある。その中で、「グローバルサウス」は、新自由主義のグローバリゼーションの悪影響を共有する経験が世界の南部による認識から生じている現代の社会運動に注目して、その根底にある新たな政治的想像力を構想している（López, 2007、Polet, 2007、Prashad, 2012）。たとえば、ジャーナル The *Global South* の創設編集者であるアルフレッド・ロペス（Alfred J. López）は、「グローバルサウス」を「グローバリゼーションの野蛮な新自由主義世界の周縁に存在する諸勢力が共有する諸条件に関する世界の従属的諸勢力間の相互承認」と説明している（López, 2011）。

ヴィジャイ・プラシャドは、この共有意識によって引き起こされた政治的行動の含意を追加し、「コモンズの盗難、人間の尊厳と権利の盗難、民主主義制度の弱体化と近代性の約束に対する抗議のこの連結」、すなわち、「抗議の世界、創造的な活動の旋風」。これがグローバルサウスであると象徴的に表現する。世界中の他の人との共有条件の特定から生じる国境を越えた政治的想像としてのグローバルサウスのこの定義、「抵抗の世界」と南 - 南の政治ネットワークを生み出す認識は、文化批評家に、現代のテキストと現代の政治情勢を予見する過去の文脈の両方で抵抗力のある文化的生産にアプローチするための有用な認識や視点を提供している（Prashad, 2012）。

〈グローバルサウスの都市と社会運動〉

加えて、政治的形成としてのグローバルサウスに関する学問の中には、現代の社会運動における都市空間の中心的な役割の研究に焦点を当てるケースもある（Mahler, 2017a）。グローバルネットワーク・パワーの相互接続されたシステムでは、都市は不平等とグローバル秩序の強制を検討し、都市の貧困層の創造的でしばしば非公式な政治組織を理解するための主要な場所になっている。（Castells, 2015）。これらの作品は、都市化と開発に関する多地域の視点を提供し（Davis, 2006、Koonings and Kruijt, 2009、Miraftab and Kudva, 2015）、1990 年代以降に都市空間に出現した新しい社会運動を研究している。

⑵「グローバルサウス」における「抗争」

「グローバルサウス」はグローバル資本主義の重要な部分を構成している。「グローバルサウス」概念は、センターとペリフェリー間の、そして「北」と「南」との多くの区別が不鮮明になっている事実を反映している。グローバル化のもとで、「国境を越えて組織され、拡散されている新たな社会的ヒエラルキーや不平等の諸形態が出現している。センターとペリフェリー――「北」と「南」――は、地理的カテゴリーというよりもますます社会的カテゴリーとなっており、それはトランスナショナルな社会構造のなかの位置」（Bullard, 2012：727）を意味する。

以上の指摘を別の側面から言い換えると、グローバルサウスは、グローバルな支配および抵抗の様式によって特徴づけられる理論的ルーツをもつ概念である。そして、新自由主義型グローバル化の下で、それは搾取や疎外や周辺化といった共通の経験を有するあらゆる被支配集団と「抵抗する」諸集団を包含する政治的アクターを示す概念でもある。「グローバルサウス」は「不平等を伴って複合的発展」するグローバルサウスなのである。

以上述べた意味で、今日、従来の「途上国」と「先進国」、また「南」と「北」といった区分は再考されなければならない。これまで言及してきたように、「途上国」や「南」というカテゴリーは現状を十分に反映しきれていない。そこで、グローバルサウスの視角が重要かつ前提となる。新自由主義型グローバル化の展開の重層性と複合性に対応して、「グローバルサウス」の重層性と複合性を認識し分析することが極めて重要である。

「グローバルサウス」概念は、国民国家中心の分析から離れ、新たな段階に向かうグローバル資本主義の推進力としての多国籍資本と多国籍化する国家によるグローバル世界の再編成の現状と行方を考察するための有効な理論的枠組みである。同時に、誤解を招かないように繰り返すが、これはナショナル・レベルの諸現象や国家間のダイナミックな分析を放棄することではない。それゆえ、「グローバルサウス」概念は、ある意味で新自由主義的グローバル化の現実の中でどのような国家形態を構想するのか、言い換えればいかなる「国家 - 市民社会」関係を構築するのか、そして、そこにおける主要なアクターに如何なる被支配集団と「抵抗する」諸集団を設定するのか、こうした諸契機や潜在的諸力を内包することにもなる。

そこで、「ローカル／ナショナル／リージョナル／グローバル」の連結関係のなかで、ナショナルなレベルでの「国家 - 市民社会 - 市場」の変容する相互関係を考察することが必要になる。つまり、「グローバルサウス」概念は「21 世紀」の世界認識を拡げ、21 世紀の「重層的ガヴァナンス構築」に向けた「政治的グローバル・サウス」や「抵抗のグローバルサウス」による対抗戦略の検討を要請することになる（松下、2016c：69-70）。

(3)「21 世紀」の世界認識に有効な視角か[12)]

ここで繰り返しを恐れず、「グローバルサウス」概念の有効性について敷衍しておく。とりわけ、21 世紀の一層グローバル化する世界を認識するために、この概念の視角あるいはアプローチが切り開く重要性と有効性に注目したい（Bullard 2012）。

「グローバルサウス」概念の登場には現実的背景と理論的系譜がある。「北」と「南」という区分は地理的・空間的な地理的現実を反映している静態的な類型化であった。また「途上国」という表現は、これらの諸国が先進国にキャッチアップするために世界銀行などが進める経済政策や貿易政策を通じて「開発」への階梯を登ることを想定している。いずれにしても、欧米中心の経済主義的基準にとらわれていた。また、国家中心的な二分法的発想も免れていない。しかし、アジアにおける NICs や NIES の登場、そして近年の BRICS の出現は、これまでの「北」と「南」や「途上国」と「先進国」という分類の限界を現実が示すことになる。とりわけ、冷戦終結後のグローバル化の拡がりと新自由主義の展開がもたらした地球規模での統合と排除や格差の拡大という趨勢を如何に認識するか、こうした現実が「グローバル・サウス」概念の登場の直接的契機となった。

同時に、こうした地理的、国家中心的な分類を批判する理論的流れも存在していた。従属論は、センターによるペリフェリーの収奪を強調し、「第三世界」の「低開発」の発展を説明した。言うまでもなく、現在では、従属論の有効性は失われている。他方、世界資本主義の立場から、国家間、国家内部の「北」と「南」を含む不均等な発展や矛盾を生み出すと考える潮流はかなり古くから知られている。国民国家よりも世界システムを分析する単位とする世界システム論は「グローバルサウス」に分析枠組みとしては類似性がある。だが「グローバルサウス」概念はまさにグローバル化時代の「サウス」であるゆえに特定の時代的規定性がある。すなわち、それは、グローバル資本主義の新たな段階を含意している。

W.I. ロビンソンは、BRICS の台頭を分析する論文において、グローバル資本主義の新たな段階として次のような特徴を指摘している。第一に、真に多国籍な資本の台頭。第二に、多国籍資本家階級の出現。第三に、国家の多国籍化、すなわち多国籍機関ネットワークへのナショナルな国家の吸収、などをあげている（Robinson, 2015）。

ロビンソンは、世界中に拡がっている自由貿易協定に関して、それは多国籍資本家階級への一層の権力集中とローカルな共同体の解体、金持ちと貧しい人々のグローバルな分極化を進めていると分析する。また、彼は NAFTA 発足以降のメキシコについて述べる。メキシコのグローバル化は、サリーナス政権下における国家内の多国籍志向テクノクラートから生じた。メキシコ国家の多国籍化とメキシコ資本家階級のかなりの部分の多国籍化は、「アメリカ帝国主義やメキシコの従属といった時代遅れの新植民地的分析の点からは理解できない過程にある」（Robinson, 2015：15）と論じる。

以上、本論の各所でも論じたように、「グローバルサウス」概念は、国民国家中心の分析から決別し、新たな段階に向かうグローバル資本主義の推進力としての多国籍資本と多国籍化する国家によるグローバル世界の再構築の現状と行方を考察するための有効な理論的枠組みである。しかし、これはナショナル・レベルの諸現象や国家間のダイナミックな分析を放棄することではない。むしろ、「ローカル／ナショナル／リージョナル／グローバル」の連結関係のなかで、ナショナルなレベルでの「国家 - 市民社会 - 市場」の変容する相互関係を考察することが必要になる。そのことが、以下で述べるように、重層的ガヴァナンス構築に向けた「政治的グローバル・サウス」や「抵抗のグローバル・サウス」による対抗戦略の検討を要請することになる。

Ⅵ　結びとして

本稿は、言論空間に拡がる「グローバルサウス」の若干の混乱を整理し、この概念の有効性と可能性、端的に言えば、「21 世紀の世界認識に有効な視角か」、この点に焦点を合わせながら考察した。そのため、まず、今日の時点での「グローバルサウス」に関する主要なアカデミックの議論を整理し考察した。したがって、ジャーナリズムや国益志向のアプローチとは一定の距離が置かれている。

「グローバルサウス」概念へのアプローチで重要なことは、この概念が浮上してきた直接的契機・背景をまず踏まえることである。これは、もちろん「サウス」概念の登場やその展開と切り離せないが、冷戦終結後のグローバル化の拡がりと新自由主義の展開がもたらした地球規模での統合と排除や格差の拡大という趨勢を如何に認識するのか、この視点であろう。そして、この視点を踏まえると、また「グローバルサウス」概念に関する今日的議論の意義ある趨勢を熟考すると、「グローバルサウス」は当然、文脈に依存しているが、欧米中心の経済主義的基準や国家中心的な発想の克服および相対化を指し示している。とりわけ、「グローバルサウス」を政治および社会を形成する空間＝場と位置付けること、社会的カテゴリーとしての位置づけの重要性を確認したい。

本稿のタイトルは、「グローバルサウス再考Ⅰ――今日的位置：課題と挑戦――」とした。多くの課題が残された。そこで、予定していた草稿「グローバルサウス再考Ⅱ――グローバル資本主義を乗り越えるために――」として、近日中に公表したい。

そこでは、「グローバルサウス」が直面する新たな現実的課題（とりわけ、移民、COVID-9、ウクライナ戦争、「ポリクライシス」）、BRICS の世界政治における位置とグローバルな諸問題への関与、新しい世界秩序の構想とグローバル・サウスの自立的な社会運動（ローカルな多様な運動とその主体形成）、新自由主義時代の非同盟運動の評価、グローバルな市民

社会と民主主義の再生などが想定されよう。われわれ人類は、いまどのような時代に生きているのか、 この問いと「グローバルサウス」の関連性を考えたい[13)]。

注

1）2019 年 11 月、ブラジルのブラジリアで開催された BRICS サミットに、南アフリカのマタメーラ・シリル・ラマポーザ大統領、ロシアのウラジーミル・プーチン大統領、インドのナレンドラ・モディ首相、中国の習近平国家主席が参加。アフリカ、アジア、ラテンアメリカの多くの主要国がウクライナでの戦争をめぐって NATO を支持することを望まないことで、「グローバルサウス」という用語を再び前面に押し出した。

2）本書では、グローバル化に統合・包摂された「サウス」という状況を踏まえて、「グローバル・サウス」を「グローバルサウス」の表記に変更した。

3）筆者は 2016 年に藤田憲とともに編著『グローバル・サウスとは何か』（ミネルヴァ書房）を刊行し、そこで「グローバル・サウスの時代」（序章）と「21 世紀のグローバル・サウス」（第 2 章）を執筆している。それ以前にも 2008 年ごろから「グローバルサウス」の重要性に注目し関連論文を発表してきた。参考文献を参照して頂きたい。

4）その点からも、本論は、「グローバルサウス再考Ⅱ――グローバル資本主義を乗り越えるために――」を次号に予定している。

5）この巻の以下の中心的執筆者とそのタイトルは参考文献で確認してほしい。
Cooper (2020); Kohlenberg and Godehardt (2020); Boatcă (2021); Berger (2020); Haug (2021); Tripathi (2021); Waisbich , Roychoudhury, and Haug (2021); Koch (2020); Abdenur (2021).

6）「序論」*Introduction: Concepts Of The Global South*（Andrea Hollington, Oliver Tappe, Tijo Salverda, Tobias Schwarz）に挙げられている本特集の主要論文とタイトルを以下に挙げておく。
- What's Wrong With The Global North And The Global South? (Thomas Hylland Eriksen)
- The Global South (*Jonathan Rigg*)
- The Global South: What Does It Mean To Kenya? (Felix Lamech Mogambi Ming'ate)
- On The Global South (Rodolfo Magallanes)
- Global South (Olaf Kaltmeier)
- GLOBAL SOUTH (Arif Dirlik)
- Not Having Neutral Terms Does Not Equal Having No Terms At All - Interview (Interview with Manuela Boatcă ; Tobias Schwarz.)
- The Global South Via The Us South (Leigh Anne Duck)
- Discussion On The Global South (Alvaro Mendez)
- What I Thought Of The Term Global South... Before I Learned How The Mainstream Uses It (Tobias Schwarz)

7）Haug, Sebastian (2021) "What or where is the 'Global South'? A social science perspective".

8）Mahler, Anne (2017a) "Global South." In *Bibliographies in Literary and Critical Theory*, edited by Eugene O'Brien, 1–2. New York, NY: Oxford University Press. Mahler, Anne (2017b). "What/ Where Is the Global South?". https://globalsouthstudies.as.virginia.edu/ what-is-global-south

9）Haug, Sebastian (2021) "What or where is the 'Global South'? A social science perspective".

10）フレイレの参加型アクションリサーチに関しては、Tripathi, Siddharth (2021). “International Relations and the ‘Global South’: From Epistemic Hierarchies to Dialogic Encounters.” *Third World Quarterly*.
エドワード・ソジャの空間理論に関しては、Haug, Sebastian (2021). “A Thirdspace approach to the ‘Global South’: insights from the margins of a popular category” , *Third World Quaterly* 42(9), 2018-2038
ポリフォニーについては、Waisbich, Laura Trajber, Supriya Roychoudhury, and Sebastian Haug (2021). “Beyond the Single Story: ‘Global South’ Polyphonies.” Third World Quarterly. 以上の諸論文で取り組んでいる。

11）Anne Garland Mahler, Global South - Literary and Critical Theory - Oxford Bibliographies *Global South - Literary and Critical Theory - Oxford Bibliographies*.

12）以下の箇所は、松下（2019a：2019b）参照。

13）拙著『ポスト資本主義序説：政治空間の再構築に向けて』（2022 年）参照。

主要参考文献

Abdenur, Adriana (2021). “Climate and Security: UN Agenda-Setting and the ‘Global South.’” *Third World Quarterly*. doi:10.1080/01436597.2021.1951609.

Berger, Tobias (2020). “The ‘Global South’ as a Relational Category: Global Hierarchies in the Production of Law and Legal Pluralism.” *Third World Quarterly*.

Boatcă, Manuela (2021). “Unequal Institutions in the Longue Durée: Citizenship through a Southern Lens.” *Third World Quarterly*: doi:10.1080/01436597.2021.1923398.

Brenner, Neil (2011). “The Space of the World: Beyond State-Centrism?” In *Immanuel Wallerstein and the Problem of the World: System, Scale, Culture*. Edited by David Palumbo-Liu, Nirvana Tanoukhi, and Bruce Robbins, 101–137. Durham, NC: Duke University Press.

Bullard, Nicola (2012). “Global South”, Helmut K. Anheier and Mark Juergensmeyer (eds.) *Encyclopedia of Global Studies*, Sage, pp.724-727.

Castells, Manuel (2015). *Networks of Outrage and Hope: Social Movements in the Internet Age*. 2d ed. New York: John Wiley.

Chase-Dunn, Christopher (2013). “BRICS and a potentially progressive semi-periphery”, *Pambazuka News*, March 19, http://www.pambazuka.org/print/84285.

Cooper, Andrew (2020). “China, India and the Pattern of G20/BRICS Engagement: Differentiated Ambivalence between ‘Rising’ Power Status and Solidarity with the Global South.” *Third World Quarterly*.

Davis, Mike (2006). *Planet of Slums*. London: Verso（『スラムの惑星―都市貧困のグローバル化』酒井隆史他訳、明石書店、2010 年）.

Dargin, Justin, ed. (2013). *The Rise of the Global South: Philosophical, Geopolitical, and Economic Trends of the 21*st *Century*. Hackensack, NJ: World Scientific Publishing.

Haug, Sebastian / Jacqueline Braveboy-Wagner / Günther Maihold (2021). “The ‘Global South’ in the study of world politics: examining a meta category”, *Third World Quaterly* 42 (9).

Haug, Sebastian (2021). “A Thirdspace approach to the ‘Global South’: insights from the margins of a

popular category", *Third World Quaterly* 42 (9).

Heine, Jorge and the Conversation (2023). "The 'Global South' is emerging in the wake of the Russia/Ukraine war. Here's how it took the place of 'Third World' in the language of economics", *Fortune*, July 4.

Koch, Florian (2020). "Cities as Transnational Climate Change Actors: Applying a Global South Perspective." *Third World Quarterly*: https://doi.org/10.1080/01436597.2020.1789964.

Kohlenberg, Paul, and Nadine Godehardt (2020). "Locating the 'South' in China's Connectivity Politics." *Third World Quarterly*, https://doi.org/10.1080/01436597.2020.1780909.

López, Alfred J. (2007). "Introduction: The (Post) Global South." *The Global South* 1.1–2: 1–11.

Mahler, Anne (2015). "The Global South in the Belly of the Beast: Viewing African-American Civil Rights through a Tricontinental Lens." *Latin American Research Review* 50, no. 1 (2015): 95–116. doi:10.1353/ lar.2015.0007.

Mahler, Anne (2017a). "Global South." In *Bibliographies in Literary and Critical Theory*, edited by Eugene O'Brien, 1–2. New York, NY: Oxford University Press.

Mahler, Anne (2017b). "What/Where Is the Global South?". https://globalsouthstudies.as.virginia.edu/what-is-global-south.

Polet, François, ed (2007). *The State of Resistance: Popular Struggles in the Global South*. Translated by Victoria Bawtree. New York and London: Zed.

Prashad, Vijay (2012). *The Poorer Nations: A Possible History of the Global South*. London: Verso.

Prashad, Vijay (2023). "The emergence of a new non-alignment: The Twenty-Fourth Newsletter" *Tricontinental: Institute for Social Research*, Jun 16.

Robinson, William I. (2015). "The transnational state and the BRICS: a global capitalism perspectives," *Third World Quarterly*, Vol. 36, No.1, 1-21.

Sandbrook, Richard (2014). *Reinventing the Left in the Global South: The Politics of the Possible*. Cambridge, UK: Cambridge University Press.

Santos, Boaventura de Sousa (2014). *Epistemologies of the South: Justice against Epistemicide*. Boulder. CO: Paradigm.

Thompson, Lisa, and Chris Tapscott, eds. (2010). *Citizenship and Social Movements: Perspectives from the Global South*. London and New York: Zed.

Tripathi, Siddharth (2021). "International Relations and the 'Global South': From Epistemic Hierarchies to Dialogic Encounters." *Third World Quarterly*.

UNDP (1996). *Human Development Report 1996, New York, Oxford University Press. World Economic Forum*, *Global Risks Report 2023*.

Waisbich, Laura Trajber, Supriya Roychoudhury, and Sebastian Haug (2021). "Beyond the Single Story: 'Global South' Polyphonies." Third World Quarterly. doi:10.1080/01436597.2021.1948832

サッセン、サスキア（伊藤茂訳）（2017）『グローバル資本主義と＜放逐＞の論理：不可視化されゆく人々と空間』明石書店。

シュトレーク、ヴォルフガング（2016）（鈴木直訳）『時間かせぎの資本主義――いつまで危機を先送りできるか――』みすず書房。

溜　和敏（2013）「インド外交の論理――非同盟から読み解くグローバルサウス」（『世界』2023年7月号）。
松下　冽――（2008）「グローバル・サウスにおけるローカル・ガヴァナンスと民主主義――参加型制度構築の視点と現状――」（『立命館国際研究』20巻3号）。
――（2012a）『グローバル・サウスにおける重層的ガヴァナンス構築――参加・民主主義・社会運動――』ミネルヴァ書房。
――（2012b）「グローバル・サウスを見るひとつの視点」（藤田和子／松下　冽編著『新自由主義に揺れるグローバル・サウス――いま世界をどう見るか――』ミネルヴァ書房）。
――（2013）「交差するガヴァナンスと「人間の安全保障」――グローバル・サウスの視点を中心に――」（松下　冽・山根健至編著『共鳴するガヴァナンス空間の現実と課題』晃洋書房）。
――（2016）「「南」から見たグローバル化と重層的ガヴァナンスの可能性」（諸富徹編『資本主義経済システムの展望』岩波書店）。
――（2016）「グローバルな世界における〈サウス〉のゆくえ（上）」（『立命館国際研究』29巻1号）。
――（2016）「グローバルな世界における〈サウス〉のゆくえ（中）」（『立命館国際研究』29巻2号）。
――（2017）「グローバルな世界における〈サウス〉のゆくえ（下）」（『立命館国際研究』29巻3号）。
――（2019a）「新自由主義型グローバル化と岐路に立つ民主主義（上）――新自由主義の暴力的表層と深層――」（『立命館国際研究』31巻第3号）。
――（2019b）「新自由主義型グローバル化と岐路に立つ民主主義（下）――新自由主義の暴力的表層と深層――」（『立命館国際研究』32巻第1号）。
――（2019c）『ラテンアメリカ研究入門――〈抵抗するグローバル・サウス〉のアジェンダ』法律文化社。
――（2022）「ポスト資本主義構想を考える：ポスト新自由主義・ポストCovid-19パンデミック・グローバル市民社会（『立命館国際研究』34巻4号）。
――（2023）「ウクライナ戦争を脱構築する――地政学を超えるグローバル・サウスの視点から――」（『立命館国際研究』36巻第1号）。
松下　冽・藤田憲編著（2016）『グローバル・サウスとは何か』ミネルヴァ書房。
峯　陽一（2013）「グローバルサウスと人間の安全保障」（『世界』2023年7月号）。

（松下　冽，立命館大学名誉教授）

Reconsideration of Global South I

――The problem and challenges of today――

The increasingly wide-spread appearance of cursory references to the 'Global South' across disciplines and issue areas suggests the need for an in-depth engagement with 'South'-related terminology. A recent *Third World Quarterly* (Special Issue) proposes approaching it as a 'meta category' in order to shed light on recognition of the 'Global South.'

In addition, the web magazine *Voices from Around the World* presents short analyses, interventions, and other contributions relevant to urgent questions concerning the Global South – and Global North. The magazine, which was launched by the *Global South Studies Center* (GSSC) of the University of Cologne (Germany) in 2015, moves beyond rigid spatial, temporal as well as disciplinary boundaries. It aims to kick-start fresh debates by presenting views from thinkers around the globe.

As the above two journals show, the appearance of the term Global South was a significant marker of the transition in global political economy and geopolitics that has led to the contemporary situation. So this article stresses that the Global South has a particular meaning in the context of neoliberal globalization and the associated anti-systemic transnational movements.

(MATSUSHITA, Kiyoshi, Professor Emeritus, Ritsumeikan University)